東京分室 PD 個人研究

浄土真宗の古典に示される理念の研究

研究代表者･東京分室 PD 研究員　鶴留 正智
（真宗学）

本研究は浄土真宗の古典、特に『歎異抄』と『教行信証』に示される「（宗教的）理念」がいかなるものであるかを明らかにすることを目的としている。「浄土真宗」ということばのうちには浄土の教えを真実の宗（ムネ）とするという意味が込められているから、そこに仏道のムネ（中心）を明らかにしようとする意志を読みとることができる。「浄土真宗」を教団を指す語としてだけではなく、いまの意味において解釈するならば、そこには「中心」としての理念的な概念を措定することもできよう。したがって、浄土真宗の理念を明らかにすることはまさに浄土真宗が何であるかを明晰にすることであり、真宗学の共通目的の一つである。その方法として採用されるのもまた浄土真宗において「聖典」の位置づけをもつ古典の読解であって、基本的には伝統的な真宗学を踏襲することになる。

しかしながら、そもそも真宗学とは何であろうか。本研究はまず、このような素朴な問いに出発し、代表的な真宗学の先達である妙音院了祥にフォーカスして研究を進めることとした。

了祥にフォーカスする理由は単純で、氏が『歎異抄』の解釈史において最も注目され、言及される名であるからにほかならない。氏の業績として特に著名であるのは『歎異抄』の著者議論であり、『歎異抄』の著者を河和田の唯円と明らかにした功績がよく言及される。

一方で、了祥の研究がいかに受容され、またいかに形成され、変遷したかについての調査は、必ずしも十分なものがあるとは言いがたい。したがって、本年度の研究は、了祥の研究の内容と意義とをより判然とさせることを目指し、それによって、どのように「理念」の研究を進めるべきかの指針を得ようとした。

まず了祥が受容されるにあたって明らかにされるべきは、了祥『歎異鈔聞記』の出版前後の状況であろう。これについては、明らかに東京の宗門内部における『歎異抄』ブームが背景にあると言える。というのは、了祥の聞記が出版される 1908 年に先立って、1903 年頃から暁烏敏、近角常観などが東京において『歎異抄』を用いた活動を行っており、また南條文雄も『歎異抄』についての本を書くなど、明らかに『歎異抄』への言及が盛んになっていることが注目される。『歎異鈔聞記』の下となった了祥の講義は 1841-42 であるから、60 年以上の時間を経て、東京の宗門人を中心とした『歎異抄』ブームの影響によって出版されたのである。

しかしながら、必ずしもこれに肯定的な評価が下されたわけではない。1910 年出版の蓮元慈広『歎異鈔講義』（大谷派安居の次講）では、了祥が如信説を否定することが「法主」の権威を否定し、また深励の権威を否定するものであるとして、『歎異鈔聞記』を強く批判する。この蓮元の講義からは『歎異鈔聞記』が読まれるようになりつつも、なおそれを受容すべきかどうかには議論があったことを知ることができる。今日のように肯定的に受容されるようになるのは、1922 年の梅原眞隆、1931 年の金子大榮、1941 年の多屋頼俊、1942 年の曽我量深の言及が代表的であり、ここに受容の定着を見ることができる。

ところで、了祥の『歎異抄』講義は、大きく前期と後期に分けることができる。前期は、国学の知見を活用するなどの点で従来の宗学からの進展を見ることができるものの、基本的な解釈は深励と差がないと言えよう。一方、後期の講義は非常に斬新かつ説得力ある議論を提示している。これは、あくまで文法と論理に忠実にテキストを読解した成果であろう。

今回、了祥の解釈の内容と、その受容の変遷について明らかになったことは、彼の独創性であり、また改めて確かめられた真宗学の方向である。彼の独創性は、親鸞と親鸞の著述を意味する「宗義」と、覚如から近世に至るまでの解釈の歴史としての「宗学」を明確に区別する、「近代教学」と共通するものである。了祥は、テキスト自体の文法と論理に即した解釈を行うことで、「近代教学」的な解釈を歴史上の「近代教学」に先立って行っていたのであり、その意味で、了祥の『歎異抄』講義は真宗学における画期的なできごとであった。

同時に、近現代における意義ある真宗学もまた、単に先学の教えを引きつぐだけではなくて、文法と論理に即した真宗学にほかならないように思われる。

以上の了祥に関する研究は日本宗教学会の第 82 回学術大会においても報告を行った。

今後の研究もまた、『歎異抄』、『教行信証』を文法的、論理的に明らかにしていく必要があるだろうから、このような観点からさらに研究を進める予定である。